

メルロ＝ポンティの文学論，あるいは言語とは何か

——サルトル側の視点から——

藤 江 泰 男*

Que'est-ce que la littérature ou le langage selon Merleau-Ponty?

—Du point de vue de Jean-Paul Sartre—

Yasuo FUJIE

はじめに

メルロ＝ポンティの中期段階の言語論として「間接的言語と沈黙の声」という作品がある。ご承知のように、この論考の発表¹⁾の数年前に公刊された、サルトルの「文学とは何か」²⁾に触発されて書かれたものである。ただし、そこで展開された「文学とは何か」に対し、まずは言語論的展開で応ずる、というメルロ＝ポンティの対応は、最初読んだ時の筆者にとっては、もう一つピンとこなかったものである³⁾。ただ、読み進むにつれて、あるいは少し分析的にリサーチするにつれて、彼の趣旨も、わかるような気がしてきたものである。

なぜ「〈間接的〉言語」なのか、なぜ「〈沈黙〉の声」なのか、この一見逆説的な組み合わせの中にメルロ＝ポンティの思想的方向性、言語と文学、さらには芸術に関する彼のスタンスが凝縮して表現されているようにも思えて、メルロ＝ポンティの思想的発展の中で、というよりも、サルトルとの関係の中で、その軌轢の中で、彼の見出した「文学」とは何だったのか、それに連なる「言語」とは何だったのか、それがなぜ〈間接的〉で〈沈黙〉なのかを解明しておきたい。少なくとも私なりの決着をつけておきたいと思い、筆をとった次第である。

メルロ＝ポンティに関しては、相変わらず次々と資料や論文・著作が刊行されているようだが、サルトルについては、一時の停滞状態は脱しているにしろ、もう一つ日本側の論文や著作が〈薄い〉ように思うのだが、素人の〈気のせい〉だろうか？ すでにフランス

1) 1952年、『現代 (*les temps modernes*)』誌 80, 81号に発表、その後『シーニュ (*Signes*)』(Gallimard, 1960) に収録。

2) 1947年、『現代』誌に発表、1948年、*Situations, II* (Gallimard, 1948) に収録。

3) 邦訳の解説(木田元氏)で、「私も一種の『文学とは何か』を書かなければならない。記号と散文についてのもっと長い部分を付け加えて……」(p. 247) との「覚え書」を残している、と紹介されている。正確には、『メルロ＝ポンティ・コレクション4 間接的言語と沈黙の声』(みすず書房, 2002年)からの引用。

哲学の主要な流れの中にしっかりと位置を占めた感のある⁴⁾、現在のサルトル哲学の扱いとしては、もう一つ物足りないと思うのは、筆者だけの偏った印象だろうか？

サルトル研究から離れてすでに久しいが、メルロ＝ポンティの著作やその紹介の文献などに触れて、再度、サルトルの哲学観ないし文学観についても考えてみたいと思った次第、もちろん、全般的に論ずるほどの蓄積も実績もない筆者としては、二つの上記論文ないし著書を軸にして、限定的に論及することになることをご容赦いただきたい。

Ⅰ. 「間接的言語と沈黙の声」の提示するもの

木田元氏の解説⁵⁾にもあるように、メルロ＝ポンティのこの論考は、大きくは三つの段落で構成されている、というか、三部構成となっている。まず、1. ソシュールの言語学、記号論の言語学を土台にした、メルロ＝ポンティの言語観を告知する段落、具体的には「間接」と「沈黙」を象徴的に折り込んで、メルロ＝ポンティ流の言語論・記号論を披瀝することになる第一部、続いて、2. 言語論から絵画論への展開、直接的にはアンドレ・マルローの絵画観を批判的に検討する段落（因みに、「沈黙の声」はマルローの絵画論の表題でもある⁶⁾）、最後に、3. 以上の検討を踏まえて、言語と絵画、それぞれのあり方を再考するとともに、両者の関係を再検討する、という三段構成、三部構成となっている。われわれの問題としては、第一段、第一部が中心となるであろう。

さて、論考の冒頭を、メルロ＝ポンティはソシュールへの言及から始める。それがそのまま、この論考全体の趣旨を、指導的理念を提示するものとなっている。つまり、

われわれがソシュールから学んだのは、記号というものが、一つずつでは何ごととも意味せず、それらはいずれも、或る意味を表現するというよりも、その記号自体と、他の諸記号とのあいだの、意味のへだたりを示しているということである⁷⁾。

ソシュールのこの表現自体意表を突くものであるが、このテーゼがまた、本論考展開の基盤・支えとなっているもので、その後の展開はすべて、このテーゼの解説である、と言っても過言ではないほどに重要である。各名辞（ターム）の意味が先にあって、それを組み合わせることで、人はその意図を表現する、つまり、各名辞の意味が全体的意味に先立つように常識的にはイメージしているが、実はそうではなく、他の名辞との違い・差異によって初めて個々の意味が確定する、つまりは意味ある表明（意味作用）に達する、と

4) 例えば、ヴィエイヤール＝バロンの『フランス哲学』(Vieillard-Baron, *La philosophie française*, Armand Colin, 2000) では、その大きな流れを形成する著作として、モンテーニュの『エッセー』、デカルトの『方法序説』、マルブランシュの『真理探究』、ルソーの『社会契約論』、ベルクソンの『創造的進化』に続いて、サルトルの『存在と無』が来ている。

5) メルロ＝ポンティ、前掲書、p. 247. 出典については、以後、邦訳→原典の順で表記する。訳文は、特に断らなければ、みすず書房版、『メルロ＝ポンティ・コレクション4』から。引用頁についても、『シーニュ』(みすず書房、1969年) からではない。やむなく一部訳語・表現を変更した箇所もあることをご了承いただきたい。原典からの引用は、*Signes*, Gallimard, 1960の頁数を表記。

6) アンドレ・マルローの絵画論、『芸術の心理学』3巻本 (*Psychologie de l'art*, t.1, t.2, t.3, Albert Skira, 1947, 48, 50) の統合版のタイトルとして『沈黙の声』(*Les Voix du silence*, Gallimard, 1951) が用いられている。

7) メルロ＝ポンティ、前掲書、p. 38 ; Merleau-Ponty, *op.cit.*, p. 49.

メルロ＝ポンティは、ソシール言語学の基本着想を語るものである。もう少しソシールの言語学体系に忠実に語るとすれば、言語体系としてのラング、文法や語彙体系としてのラングを前提にしてパロールの活動ないし言語活動があるのだが、その関係性は、一種の循環構造をなしており、ラングが先行し・教示し・解説を暗示する、かのごとく展開すると解説している。ランゲージュの不思議な特質と断りつつ⁸⁾、ではあるが……。

以上のような言語の理解は、そのままでは常識の側からの承認は難しいにしろ、発生時の言語を想像する場合でも、言語の成立以降、各国がそれぞれに共通語を持ち、諸方言を保持するようになった時点でも、十分に納得のいく理論的立場ではある。もちろん、その後の思想史的展開でも明らかなように、構造主義的解釈や視角とは相性の良いものであろう。もっともメルロ＝ポンティは、構造から現実の言語活動への、つまりラングからパロールへの一元的方向性のみを語っているわけではない。大枠としての構造、言語の体系性を前提としつつも、パロールの展開の中で、各名辞の意味は事後的に確定する、と語ることになる。

そうした全体と部分との関係性、全体の先行性の考え方は、大人の言語活動のみならず、幼児の言語獲得時、話し始める前後の言語活動についても同様に、原則変わらないものの、とメルロ＝ポンティは主張する。音素から初めて一まとまりのタームやフレーズが、一つ上のグループの働きをすることで⁹⁾、ある時「内側からしか開かない扉¹⁰⁾」を開けることになる〔話せるようになる〕、と展開するメルロ＝ポンティの論理は明快にして説得的である。これはわれわれが外国語を習得する時に経験するものと同種の体験である、とも言えよう。いつの間にか、向こう側、外国語が話されている日常の経験の場にわれわれもまた入り込むのを経験するのだから。外国語の習得はいわば幼児の言語体験を追体験する、とも言えるわけだ。

こうした展開、個人における言語活動の始まりに関して、次のような印象的な表現でメルロ＝ポンティはまとめている。

……つまり、子どもは、最初の音素的な対立によって、記号と意味との終局的な関係の基盤としての、記号相互の〔記号から記号への〕いわば側生的な結びつき (*liaison latérale*) を教えられるのである¹¹⁾。

8) 同書, pp. 38-39; *Ibid.*, p. 49. 言語に関連する三つのタームの訳語(訳し分け)については、時に悩ましいこともあるが、相互の基本的違いは、体系としてのラング (*langue*: 国語ないし言語)、言語の実際上の運用としてのパロール (*parole*: 言活動ないし言葉)、以上二つの機能を統合する術語としてのランゲージュ (*langage*: 言語活動ないし言語) ということも、ここで確認しておこう。

9) 「子供の場合、語は……句として、音素は……語として作用するものだ……」(同書, p. 39; *Ibid.*, p. 50), というように、それぞれ一段上の機能を果たすということ。これを、ソシールの「言語(ランゲージュ)の組成力(←「分力」の訳語を変更 *composantes*)」(同書, pp. 39-40; *Ibid.*, p. 50) に繋げて展開している。

10) 同書, p. 41; *Ibid.*, p. 51.

11) 同書, pp. 40-41; *Ibid.*, p. 51. 一部、訳文を変更して引用。このパラグラフの最後でメルロ＝ポンティは、次のようにまとめている。「記号が最初から弁別的であるからこそ、また、記号がそれ自身によって構成され、組織されるからこそ、記号は或る内面を持ち、ついには或る意味を要求するにいたるのである」(同書, p. 41; *Ibid.*, p. 51)。この箇所の邦訳は、意味のずれた訳文になっているかと思われるので、ここでは“強調構文”に忠実に訳している。どうかご容赦いただきたい。

こうした意味の発生の探求こそ、メルロ＝ポンティが本論考のタイトル「間接的言語」という表現で伝えたかったことに、直接絡むもののように思われる。直接的な意味の指示の前に、記号間の差異の関係の確立が先行しているからである。あくまで、構造的には、側生的な関係を根拠にして意味が確立する、と語っているわけである。その側生的な関係の中に、また沈黙も含み込まれることになる。それについては後述する。

各記号から意味への長い道のりをメルロ＝ポンティは、様々に具体例を活用しつつ、全体性の優位ないし先行性について論じてゆく。もちろんそれは、部分の時間的・事実的先行や試行錯誤に裏打ちされた相互の影響関係にはあるのだが、論理的な先行性、ないしは言語（ランゲージュ）の自己展開を主張するのである。構造主義への親和性が極めて強く滲み出た展開といえよう。

本稿では、こうした言語学的理解の妥当性について論じたいわけではない。メルロ＝ポンティのソシール理解の先駆性と先鋭性についても認めるにやぶさかではないが、それは本論考のテーマではない。サルトルの「文学とは何か」、メルロ＝ポンティが本論考で応えたはずのサルトルの著作との関係の解明こそが、われわれのささやかな目標である。この目標に関係する限りで、つまり極力限定的に、彼の論考の内容を語ることにしたい。「沈黙の声」というタームに込めたメルロ＝ポンティの意味を簡略に確認しておいて、それに対応するサルトル側の表現なり言明なりを見てみよう。

ある種の直接的表現を認めない、ということではないが、それは表現の本質的運動ではない、言語の基本的ないし本来的運動ではない、ということであろう。第4パラグラフで、「言語（ランゲージュ）は、それが物そのものを語ることを断念した時に、断乎としたかたちで語る¹²⁾」と幾分神秘的な言い回しを介してメルロ＝ポンティは、言語の間接性、表現の間接的構造についても明確に論及している。それは、事務的な表現ではなく独自の・創造的な表現の場においては、言語はいつも間接的になる、と語っているのである。マラルメの言う「擦りへった貨幣」ではなく、「真の言葉」つまり「どんな花束にもないようなものを……現存させ」るような真の言葉を問題にしている。上記の経験的言語使用からすれば、それは「沈黙にすぎない」、「間接的でかつ自律的であるのは言うまでもない」と認めている。それをまた機織り職工と比較して、創造的な言葉を編む「作家は裏面から仕事をする」と、ここでもまた、一見突飛とも見える事例を引き合いに出している。それはつまり、言語の直接性の対極であり、対象よりはまず言葉自体に関わる作家のあり方、関心の向かい方に注意を促しているのである。

こうした「言語の間接性」と「沈黙の声」に関わる展開は、すでに触れたように、サルトルの文学論、あるいは、その中に巧まずして表現された言語論に対する応答、あえて言えば、批判的応答に関わる部分であろう。かかる視点はまた、言語と絵画の違い、作家と画家の比較の問題にも繋がるのであるが¹³⁾、今回のテーマではない。まずは、問題のサルトル著「文学とは何か」について、メルロ＝ポンティの論考に関連するものを中心に見て

12) 同書, p. 48; *Ibid.*, p. 55. 以下の部分的引用も、すべて同頁。ちなみに、マラルメからの借用は、例えば『マラルメ全集Ⅱ』「詩の危機」(筑摩書房, 1989年) pp. 241-42; S. Mallarmé, *Œuvres complètes II*, Gallimard, 2003, pp. 212-13 から。

13) 「まず第一に、沈黙せる言語があることを、また、絵画はそれ自身の流儀で語っていることを理解しよう」(同書, p. 54; *Ibid.*, p. 59) という表現で、メルロ＝ポンティは第一部を締め括っている。

おこう。

II. サルトル「文学とは何か」の言語論

さて、その「文学とは何か」であるが、まずサルトルの主宰する雑誌『現代』に発表され、程なく『シチュアションII』に収録され刊行もされた¹⁴⁾この論文は、サルトルのいわゆるアンガジュマン文学とは何かを、「書くとはどういうことか」、「なぜ書くか」、「誰のために書くか」といった文学の基礎的枠組みの中で語った、直球勝負の文学論である。その趣旨や重要性については、人文書院から「改訳新装版」として出版された『文学とは何か』の冒頭、海老坂武氏が的確にまとめられ・紹介されているので、ここでは語らない。もちろん、専門外の内容を、素人の当てずっぽうで語りたくないという禁欲的思いもあるが、もとより本論考の趣旨ではないからである。われわれの目的は、前述したように、はるかに限定的なもので、サルトルの文学観、言語観のどこにメルロ＝ポンティは反応し、先の論考の筆を採るに至ったか、というものであるからである。

その中心にあるのが、「間接的言語」と語られ、「沈黙の声」（こちらは、直接的にはまず絵画を指示するタームではあるが、もちろん、言語の基本的なあり方にも連なるものである）として論及された、論考のタイトルとなっている表現の趣旨そのものであるが、まずはサルトルの著作から確認しよう。

『文学とは何か』¹⁵⁾の第1章「書くとはどういうことか〔何か〕」において言及されている記号ないし言語の捉え方が、直接メルロ＝ポンティのこの論考に対応するものであると思われる。それは、以下のように述べられている。

逆に、作家の仕事は意味（significations）に係っている。とはいっても作家の仕事には次の区別がある。すなわち、記号の帝国は散文（prose）であり、詩（poésie）は絵や彫刻や音楽の側にあるということだ。人は私が詩を忌み嫌うといって非難する。その証拠には、『現代』誌に詩がほとんど発表されないという。それどころか、それこそわれわれが詩を愛している証拠なのだ。……しかし詩は散文と同じ仕方では言葉（mots）を使用しない。いや、詩はまったく言葉を使用しないのである。むしろ詩は言葉に奉仕するものだといえよう。詩人とは言葉を利用することを拒絶する人間である¹⁶⁾。

同じパラグラフの少し後では、さらにこう展開している。

……記号には、ガラスのようにそれを意のままに横切り、それを通して意味されたも

14) 注2)ですでに記載したように、1947年2月、雑誌『現代』誌で公表、48年、*Situation, II*の中に収録され刊行されている。

15) 今後、二重括弧で表現する。「文学とは何か」のみで刊行された、新装版の邦訳を引用に使用することもあり（人文書院・1998年刊行、新装改訳版の『文学とは何か』である）、単独の著作としての扱いに、ここで変更する。仏語原典でももちろん、そうした版はあるが、今回の引用、参照としては使用しない。

16) サルトル『文学とは何か』（人文書院、1998年）p. 19: Sartre, *Situations, II*, Gallimard, 1948, p. 63: 因みにこれは、エルカイム＝サルトル氏編集になる改訂版 *Situations, II* (Gallimard, 2012) ではない。

のを追求できるし、或いは視線を記号そのものの現実へ転じ、それを対象と見做すことも出来るという二面的性質 (ambiguïté) があるからである。語る人間は、言葉の彼方に、対象のそばにある。詩人は、言葉のこちら側にある。前者にとっての言葉は、飼い馴らされている。後者にとっての言葉は、野性のままである。前者にとってそれは役に立つ約束であり、次第に使い古されてもはや役に立たないというときには棄てることのできる道具である。後者にとってそれは草や木のように地上におのずから成長する自然のもの (choses naturelles) である¹⁷⁾。

引用部分でも明らかなように、詩人の使う言葉と散文で語る作家の使用する言葉との違いを、サルトルが印象的に切り取っているのが分かつ。その基本的な違いは、言葉そのものが問題である、あるいは言葉が対象である詩人と、言葉の意味するものが問題である、あるいは「意味されるもの」が対象であり問題である散文的作家、という違いである。言葉自体の組み立てや響きに何よりも関心を持ち、配慮する詩人に対して、散文の作家は、そこで語られる事態そのものを重要視する、という基本的にして決定的な違いである。

散文的作家の事物に直接迫る言葉の使い方、つまりは道具としての言葉の使い方と、言葉それ自体が目的である詩人の言葉の使い方、この決定的な違いが、メルロ＝ポンティの言葉の直接性と間接性との使い分けに関する着想の起点になっているのは確かであろう。それを起点にしながらも、彼らしい区分けを再度施し、サルトルの見解を変更するほどまでに至っている、と評することはできようか。野生の自然を扱うように言葉に向かい合う詩人、問題そのもの、問題の現場に直接関心を向ける散文的作家、あえて言えば、ジャーナリスト的作家との区別は、サルトルの文言の中では一貫して明確であり、ぶれることはない。こうした点の最終的な確認は次章に譲るとしても、先の引用箇所でも明確に述べているように¹⁸⁾、「詩は絵や彫刻や音楽の側にある」という、音楽や絵画といった他の芸術ジャンルと詩との親近性もまた、ここに確認しておこう。

それはまた、サルトルのいわゆる「アンガジュマン (engagement)」文学、アンガジェ (engager/engagé) することの意味を問う『文学とは何か』の中の先の引用箇所でも明らかなように、これに関する散文と詩の違いが、絵画や彫刻・音楽に対しても同様に認められる、ということだろう。

もっとも、ここで触れたいのは、「engager/s'engager」という言葉の意味の微妙さでも、訳し辛さでもない。サルトルの政治的主張も含めて、文学論の中核にある基本姿勢、基本的視座を表現するタームを支えている情熱、そのパスカルの志向の強烈さである。この情熱との連動性をサルトルは、パスカルの有名な断章¹⁹⁾を敢えて想起させるかのように、次のように語っている。

17) 同書, p. 20; *Ibid.*, p. 64.

18) 本稿の注16)の引用の中で、「詩は絵や彫刻や音楽の側にある……」と、サルトルは明確に表現している。

19) もちろん、「賭け」の断章(ブランシュヴィック版, 断章233; ラフマ版, 断章418)であるが……。

われわれは作家がその作品の中に自己の全体を投ず〔参加させる (s'engager)〕べきであると思うが、それは卑劣な受動性として、自分の悪徳や不幸や弱点を前面に押し出すことによってではなく、断固たる意志として (volonté résolue)、択び (choix) として、われわれ一人一人がそうである生きてゆく全体的な企て (cette totale entreprise de vivre) としてである。そうであるからには、われわれはこの問題を発端からとりあげ、われわれの側でも、何故書くかをみずから問うのが当然である²⁰⁾。

生の全体的投企として、作家は意志的にアンガジェすべきであると語ることで、サルトルは第1章「書くとは何か」を締め括るのである。

また、第3章「誰のために書くか」では、先のパスカルの「賭け」の断章を明示的に参照しつつ、次のような展開が来ている。アンガジェ (engager) とアンバルケ (embarquer) との対比も鮮やかに、アンガジュマンとは何か、文学とは何か、を明確にしようとする箇所であるが、まずはエティアンブルの文章を引用するところから見てみよう。最初の引用文は、彼 (エティアンブル) によるサルトルの文章から、である。

《……作家は、何をしようと加担している。遠い隠遁所に逃れる場合でさえ、作家の刻印を帯び、巻き込まれている》と。加担している、かわり合いになっている。ほとんど、《われわれは船に乗り込んでいる (nous sommes embarqués)》というブレーズ・パスカルの言葉を私に思い出させた。しかし突然、拘束されているということ (engagement) が、……²¹⁾。

サルトルの「アンガジェないしサンガジェ (s'engager)」をパスカルの「アンバルケ」(船に乗り込んでいる) に関係づけ、さらに、そうした事態を一般的な拘束・隷属状態として理解することで、日常化しようとするエティアンブルの志向を批判的に修正しようとして、サルトルは、パスカルのフレーズに絡めて、自身のアンガジュマンの趣旨を、こう解説している。

すべての人間が船に乗り込んでいるにしても、そのことは、すべての人間がそれを完全に意識しているということを意味しない。大多数の連中は、彼らの拘束状態を自分自身に隠すために、時を過ごしている。……作者が参加している (engagé) と私が言うとき、それは、彼が船に乗り込んでいるということについて最もはっきりした最も全体的な意識をもとうとしている、即ち、彼が、彼自身及び他人のために、その拘束―参加 (engagement) を無媒介的な自発性から反省的なものにしようとしている、ということだ²²⁾。

単に、状況の中で、状況の中に必然的に乗り込んでいる、関わっている、ということではなく、つまり、その関わりを、素朴な・直接的な状態において、ではなく、それを自覚

20) サルトル、前掲書、p. 40 ; Sartre, *op.cit.*, p. 84.

21) 同書、p. 82 ; *Ibid.*, p. 123.

22) 同書、pp. 82–83 ; *Ibid.*, pp. 123–24.

的・反省的・意志的な次元に高めるべきこと、自身に対しても、他者に対しても、作家にはそうした責任が伴う、とサルトルは語るのである。いずれにしろ、われわれは状況の中に乗り込んでいる、意志的にしろ、無自覚的にしろ、である。そしていずれにしろ、状況の中に拘束されているのであれば（つまりは、すでに船に乗り込んでいるのであれば）、その拘束状態を、自覚的・意志的なものにすべきではないか、たとえそれが同じ立場の表明になるにしても、というわけである。パスカル流に言うならば、すでに船に乗り込んでいる、賭けたことになっている、のであれば、それを意志的・自覚的に、つまり、自己の選択によってなすべきではないか、という主張である。

こうしたサルトルのアンガジュマンに絡む問題、さらに「アンガジュマン文学」の決意表明とでも言えそうなテーゼが、サルトル側の記号・言語の直接性と間接性の区別には、認められる、とも見なせるであろう。

こうした詩と散文の違い、記号の間接性と直接性との違いはまた、メルロ＝ポンティの本論考での主張とも直接絡まっているものである。その帰結について、最後に分析ないし確認して、本稿の最終章としよう。

III. 間接的・沈黙、ということ

再度、メルロ＝ポンティの「間接的言語と沈黙の声」に戻ろう。メルロ＝ポンティのテーゼは、サルトルのテーゼを受け止め、それをさらに原理的に拡大し、言語の使用上の区別にとどまらず、言語のあり方そのもの、として普遍化・一般化したところにその特徴があるように思われる。

そうすると、もはや言語（ラング）ないし言葉、あるいは言語活動（ランガージュ）ないしパロールは、それ自体ですでに、意味はその間接性の中から、つまり側生的関係から、個々のターム間の沈黙の間合いも含めて、側生的関係から湧出してくるものとなる。それは詩人にとっての特別の特権的な言語活動にとどまらず、作家一般の言語活動となってくる。つまり、創造的な作品を発表し、独自の表現を志向する作家²³⁾、もちろんジャーナリストにしても例外ではない、ということになる。メルロ＝ポンティの鑑識眼からすれば、メルロ＝ポンティ流に、繊細にテキストを織り上げる研究者の論文にしても然り、というわけである。もともと、意味は表現の全体、パロールの活動の全体的運動の中から限定され仕上がってくるものだと、メルロ＝ポンティは明確に告知している。創造的に言語を活用している限りで、あるいは創造的な言語活動に勤しんでいる限りで、作家は詩人と何一つ変わらない、その言語の間接的使用において、というわけである。また、「機織り職工」同様、言語の裏面から仕事をするということにおいても、詩人と同じである。「すり減った貨幣」のような言葉を使用するのではなく、まさに新たな香り、経験したこともないような花束の香りで以って、現実にはないものを存在させるような言語活動において、もちろんマラルメのような詩人の作品でも、メルロ＝ポンティのような上質の研究者の論文でも、というわけである。テキスト相互の絡み合いから醸し出される新たな意味、新たな存

23) 経験的な言語活動と創造的なそれとの違いが問題なのである。Cf. メルロ＝ポンティ、前掲書、p. 49. 「すでにできあがった言語・ランガージュの、経験的な使用を、その創造的な使用とはっきり区別しなければならぬ」と。

在の創出をそこに見る、ということであろう。こうして、詩と散文とが同一の基盤の上で出現している、と評せよう。二つのあり方を連続的な流れの中に位置づけ、そのグラデーションの中の違いとして、詩人と散文的作家とを区別することによって、サルトルの発想にメルロ＝ポンティ自身の変奏を加えているわけである。

そうした区別が、アンガジュマンに重なるかどうかは、メルロ＝ポンティについては判断不能だが、サルトル的判断に沿うならば、詩の方がより政治参加から遠い位置に立つ、ということになる。それはもちろん、グラデーションの中で、内容に即して位置付け、判断すればいいのかもしれないが……²⁴⁾。

さて、メルロ＝ポンティの間接性、沈黙に関する最終的判断について確認しておこう。第一部の後半部分では、直接、絵画的表現と言語的表現との比較について展開する箇所もあり（第6パラグラフないし第7パラグラフ）、前半部よりはるかに端的・明快に語っている。この箇所に先行する段落で、ソシュールに倣って関係代名詞の省略を例に引きつつ、その省略における表現、「語のあいだの空白を通しての、言語の中に入り込んだ²⁵⁾」表現に注意を喚起して、いずれの言語（ラング・国語）にも、完全性において優劣はないと評し、「記号の不在も一つの記号でありうる²⁶⁾」と語ることになる。

これはつまり、沈黙の語る言葉、記号を伴わない空白としての表現ということになるろうか。それも含めて作家は作品に意味を込める、ということである。そうした語らないことの意味作用、沈黙の中の雄弁な声の問題は、直接、言語と絵画、作家と画家を比較するパラグラフで再度整理されることになる。それが先述した第6・第7パラグラフでの展開である。

つまり、絵画と文章との一般的な対立的理解に触れたのち、もう一段深化した理解をすべきだとメルロ＝ポンティは力説する。いわゆる絵画的要素と文章的要素との共通性への誘導、統一化への志向である。彼はこう語っている。

しかし、言語 (langage) が、語によってと同様、語のあいだにあるものによって何かを言い表すとしたらどうだろう？ それが「言う」ものによってと同様、「言」わぬものによっても、何かを言い表すとしたらどうだろう？……²⁷⁾

「経験的な言語 (langage)」と対立的に提示された「創造的な言語」の存在をそうした「色彩の漠とした生」とみなし、「そこでは、意味作用が、記号間の相互作用 (commerce des signes) からまったく解き放たれているわけではない……²⁸⁾」という表現でもって、こ

24) 「われわれは絵画や彫刻や音楽にも『はっきりした立場』が必要であるとは思わない」（サルトル、前掲書、p. 15；Sartre. *op.cit.*, p. 59）とは本著作ないしは本論考冒頭の言葉ではあるが……。色や音によって仕事をする者と言葉によって仕事をする者とは関わり方は異なる、というのは当然のところであろう。素材の違い、表現形式の違いから直接的意味に関わる芸術もあれば、間接的にまずは関わらざるをえない芸術があることは自明であろう。それを前提にしてもなお……として、先の区別あるいは統合化の着想が出てきているわけである。

25) メルロ＝ポンティ、前掲書、p. 47；Merleau-Ponty, *op.cit.*, p. 55.

26) 同書、p. 48；*Ibid.*, p. 55.

27) 同書、p. 50；*Ibid.*, p. 56.

28) 同書、同頁；*Ibid.*, pp. 55-56. 部分否定に関連して、訳文を一部変更。

の対立・対比の融和を図っている。

このようにメルロ＝ポンティは、沈黙によって、あるいは空白によって語る、意味が最終的に確定するという理解を、まずはソシュールの言語学から引き出し、それを表現の意味、趣旨にまで拡大するとともに、作家と画家の違いにも橋をかけることになる。その違いもまた、相対的なもので、共通性を基盤に出現するものであること、語っている世界も沈黙の世界も、ともに共通に語っているということ、ともに沈黙してもいるということ、こうした二つの芸術ジャンルの違いに橋をかけるとともに、詩人と散文的作家との間にも橋をかけることになる。散文もまた、少なからず言語自体を問題にし、間接的に語ることもある、ということ、それがまた言語学的構造から必然化しているとともに、一見した隔たりを結びつけることにもなる。それは、特権的な芸術家の営みだけに生じるのではなく、われわれが独自の思いを語ろうとするときに、いつも生じている、生じかけている事態なのであろう。

できあがりつつある言いまわしの持つ意味は、この種のもの〔一対一対応のような言葉と意味の対応〕ではありえない。すなわちそれは、語のあいだににじみ出る側面的ないし斜面的 (oblique) 意味である²⁹⁾。

「沈黙せる言語 (langage) があること、また、絵画はそれ自身の流儀で語っていることを理解することから始めよう³⁰⁾」という言いまわしで、第一部が閉じられる所以である。

このような相互融和的關係の構築は、しかし、サルトルの見解と対立するものではない。むしろ、その主張を拡大し、沈黙、間接性をともに言語にも認めることで、その対立的な理解に修正をもたらすものではあるが、サルトルにしても、そうした主張をしていない、ということではない。例えば、先の『文学とは何か』の中に、次のような一節がある。

全体の意味 (sens) が、各々の言葉 (mots) の意味を理解させるのである。文学的対象は、……言語 (langage) のなかに与えられているのではない。却って、対象の本来の性質は、沈黙であり、言葉 (parole) の否認 (contestation) である。現に一冊の本のなかに並べられた何十万の言葉 (mots) を一つまた一つと読んでも、作品の〈意味〉は、必ずしもそこから出て来ない。〈意味〉は言葉 (mots) の合計ではなくて、言葉のつくる有機的な全体である³¹⁾。

言葉による表現が沈黙する対象に迫る試みであり、そのためには、その沈黙を語り・表現しなければならない³²⁾、というわけである。

29) 同書, p. 53; *Ibid.*, p. 58. [鉤括弧] 内の補足は筆者。

30) 同書, p. 54; *Ibid.*, p. 59. (訳文, 一部変更)

31) サルトル, 前掲書, p. 53; Sartre, *op.cit.*, p. 94. 第二部からの引用である。

32) 同書, pp. 53-54; *Ibid.*, pp. 94-95.

“エピローグ” にかえて（メルロ＝ポンティ追悼のコラージュあるいはオマージュ³³⁾）

すでに当初提起した問題については、十分に述べたかと思う。もちろん、内容的にご不満の向きもおられようが、筆者の能力以上のものは紡げないので、その点をご容赦いただきたい。ここでは、サルトルとメルロ＝ポンティの交友関係の推移を確認して、屈折した形で終わらざるをえなかった彼らの「友情」の重みと（サルトルの）痛切な無念さについて一言述べて、「エピローグ」的展開に替えたいと思う。

まず、この種の経緯については、サルトル自身が書いたメルロ＝ポンティへの追悼文が、最高にして最良のデータであろう。少なくとも、サルトルの思いが極めて直接的に、素朴に表明されており、出色の追悼文となっている。それはまた、メルロ＝ポンティの年来の思い、それに連なる学究生活、さらには同志として活動した『現代』誌での日々、そしてまた、二人の友情の亀裂とその後の修復などを検証・確認するための、豊かな情報提供源となっている³⁴⁾。

さて、サルトルにとっては、高等師範学校での2級下の学生メルロ＝ポンティとは、入学年度の違いもあり、最初から、さほど親しかったとは言えない³⁵⁾。もちろん、疎遠な関係でもなかったはずであるし、お互いに対立していたわけでもない³⁶⁾。おそらく、始めはさほど意識する存在ではなかったのであろう、と思われる。

フランスの占領時代を経て、サルトルにしろ、メルロ＝ポンティにしろ、社会的・政治的活動の重要性を痛感するにいたり、戦後共同で始めた『現代』誌での活動となるわけで

33) 以下、本文での引用はすべて、サルトルによる追悼文「メルロ＝ポンティ」（雑誌『現代』、1961年/『シチュアション、IV』1964年）からである。

34) このサルトルの追悼文に関して「意趣返し」と解する向きもあるようだが（松葉祥一他編『メルロ＝ポンティ読本』法政大学出版局、2018年、p. 131）、いかがなものだろうか。両者の哲学的立場の評価にとっても、また、心情的な表現の理解にとっても、あまり意味のないコメントのように思われるのだが……。オリヴィエ・トッドなど懐かしい「コラムニスト」にも言及されて、興味深い論考ではあるが、追悼文の受け止め方としては、やはり違うと思う。

35) ちなみに、前掲『メルロ＝ポンティ読本』（p. 3）に「同級生には、サルトル、P. ニザン、J. イポリット、G. カンギレムらがいた」とあるが、サルトル、ニザン、カンギレムは、ともに24年入学の同級生、イポリットが1学年下の25年入学、いずれも26年入学のメルロ＝ポンティよりは先輩の学生たちである。「サルトルとは当時さほど親密でなかった」とこの文章は続いているが、まずは学年の違いによるものであることを、誤解なきように伝えるべきであろう。イポリットが、たとえ、メルロと親しい友人になるにしろ、あるいは、友人であったにしろ、である。その出典として挙げられている資料（GC『G. シャルボニエとの対話』と記載）に何があるにしろ（筆者自身はまだ、抜粋でしか当たれないので、最終的な確認はできないが）、事実としては動かない。

36) メルロ＝ポンティに関する「騒動」の現場に割って入り、サルトルがそれを収めたという、ある種の武勇伝的な逸話が残っているのは確かである。例えば、前掲『メルロ＝ポンティ読本』p. 4; ボーヴォワール『別れの儀式』（人文書院、1983年）pp. 325-26; Beauvoir, *La cérémonie des adieux*, Gallimard, 1981, pp. 365-66. 加賀野井秀一氏『触発する思想 メルロ＝ポンティ』（白水社、2009年）p. 39にも引用あり。果ては「誤訳」の可能性にまで及んでいるようだが……。Cf. 同書、p. 39.

ちなみに、『別れの儀式』の訳についても、違う意味で問題あり、かもしれない。「例えばメルロ＝ポンティだけど、あなたはとても仲が悪かったんでしょ」と訳されているが、これはニザンやサルトルを含む仲間の行動に関して言及した時のボーヴォワールの発言・質問であり、「……あなたたちは、（彼とは）とても仲が悪かったんでしょ」[←...vous aviez de très mauvais rapports avec lui? とても悪い関係だったんでしょ?]と訳するのが自然な場面であろうかと思われるが……。何か確証があれば別だが、その前後のvousを〈複数〉で訳しておいて、ここではなぜ〈単数：サルトル〉で訳されたのか、筆者には不明である。

ある。しかし、政治的立場を共有していたわけではない。サルトルは、メルロ＝ポンティほどにはマルクス主義寄り、ソ連寄りではなく、その点が、朝鮮戦争勃発のショックの大きさ・深刻さの違いに現れているように思われる³⁷⁾。両者の対立以前にメルロ＝ポンティは、カミュからソ連寄りの姿勢を厳しく論難され、それをサルトルが取りなそうとした、という修羅場も経験している。そのことを、サルトルは以下のように伝えている。

或る夜、ボリス・ヴィアンの宅で、カミュがメルロはモスコー裁判を正当化しているといって責めかつ非難した。それはいたましかった。私は今なお彼らの様子が眼に浮かぶ。カミュは激しており、メルロ＝ポンティはいささか青ざめて、丁重だが確固たる様子であり、カミュは激情を誇示するが、メルロの方は自制している。突然、カミュは身をひるがえして出ていってしまった。……調停役を買って出るなんて何と愚かな企てだろう！ 全くだ。私はメルロの右、カミュの左にいた。もう少し後になれば相次いで私のコミュニストたちに対する好意を批判するはずの、そしてふたりながら、折り合わぬままに死んでしまった友の間の仲介をつとめようとは、何という汚らしい道化気分のいたずらか〔何というブラック・ユーモアだろうか〕³⁸⁾。

「メルロの右、カミュの左」とはもちろん、政治的スタンスのことである。『ヒューマニズムとテロル』でも表明されているように、メルロの立場は単なる平和主義ではない。そうした厳格さ、単なるヒューマニズム的・平和主義的言動³⁹⁾に批判的な立場は、当時のサルトルからすれば、まだ到達できていない地点なのである。だからこそ、朝鮮戦争の開始、社会主義国から戦争の引き金を引いたとされるこの戦争は、受け止め難いものであったのであろう。それが1950年以降のサルトル・メルロ＝ポンティ間の対立の起爆剤となり、53年の決定的な決裂、メルロ＝ポンティの『現代』誌からの脱退、となるのである。

こうしたメルロ＝ポンティの思想的・社会的活動の転換について、サルトルは、それを三段階に分けた形で説明している。まず、その第一期、第二期については、こう語っている。

……戦前から、この若きエディプスは自分の出生をふり返って、自分を生んだ条理ある不条理を理解したいと思った。彼がそれに近づいて、『知覚の現象学』を書いているとき、〈歴史〉がわれわれの咽喉元に飛びつき、彼はそれと格闘するが研究は止めない。これが彼の省察の第一期だと言いたい。第二期は〈占領〉の末年にはじまり1950年までつづく。学位論文が完成して、彼は探求を捨てて、〈歴史〉や、現代の政治に問いか

37) ソ連の防衛的スタンスを強調するメルロ＝ポンティ『ヒューマニズムとテロル』（現代思潮社、1970年、p. 201；*Merleau-Ponty Humanisme et terreur*, Gallimard, 1947, p. 188）で、「……ソ連や共産党は防御の側にある」と、メルロは明快に、その戦術的立場について解説している。

38) 追悼文の中のサルトルの文章である（『シチュアションIV』人文書院、1964年、pp. 181-82；*Situations, IV*, Gallimard, 1964, pp. 215-16）

39) 抽象的ヒューマニズム、西欧的ヒューマニズムなど、いずれも、メルロ＝ポンティの批判的見地からの命名である。マルクス主義的ではない、ということであろう。その特権性に気づいていないヒューマニズム、というわけである（メルロ＝ポンティ、前掲『ヒューマニズムとテロル』pp. 171-72, 192；*Merleau-Ponty op.cit.*, pp. 313-14, pp. 329-30, など、いたるところで）。

けるように見える⁴⁰⁾。

第三期については、

1950年の彼の失望は、いかに苛いものであったとは言え、それが彼に役立つべきものであったことは自明である。それは、彼をわれわれの悲しい闘技場から遠ざけたが、しかし、同時に、彼に、全く同一でもないが全く別でもない、あの謎を提示した。すなわち自己を、である。彼はスタンダールのように、彼自身に他ならぬ個人を理解しようとはつとめず、むしろモンテーニュ流に、特殊なものと普遍的なものとの比類ない混淆である人間というものを理解しようとした⁴¹⁾。けれども、それだけでは十分ではなかった。ほどくべき結び目が残っていた。彼はそれにとりかかったが、そのとき不意に起こった彼の母親の死がその結び目を切り離してしまった。彼が、その悲嘆によって、この不幸な偶然をわがものとし、それを自己の最もきびしい必然性たらしめたことは賛嘆に価するだろう。その数年前から予知されていたとはいえ、彼の省察の第三期は1953年からはじまる⁴²⁾。(同書、p. 222)

占領末期から50～53年までが第二期、53年以降が第三期、第一期はもちろん、彼の最初の学究時代、個人的問題を哲学に絡めて探求し、知覚論を中心に自己の哲学を構築しようとしていた若き日の省察の時期である。サルトルによってまとめられ・分類されたメルロ＝ポンティの省察の三段階とは、以上のようなものである。第三期は、社会的活動の後で、再度元の学究生活に戻った、ということでもある。この二つの時期の基本的差異と共通性については、もはやここでは繰り返さない。サルトルの文章に直接当たって頂きたい。

そうした政治的・活動的生からの別れの後、両者の亀裂の修復について最後に確認して、分散的になりかけている本稿を、なんとか締め括りたいと思う。

『弁証法の冒険』によるメルロ＝ポンティのサルトル批判、それに答えるボーヴォワールの応酬という二人の対立が公表された後、程なく和解への動きが始まる。

それはヴェニスにおいて、1956年のはじめごろであった。〈ヨーロッパ文化協会〉がそこで〈東〉の作家たちと〈西〉の作家たちとの間の対談を組織していた。私はそこに行った。席に着くと、私は隣の椅子が空いているのに気づいた。身を乗り出してみると、名標の上にメルロ＝ポンティの名前が見えた。われわれを並んで座らせれば気に入るだろうと思われていたのだ。会議がはじまり、私は上の空でメルロをまっていたが——不安でなくもなかった。彼はやってきた。いつものように遅れて。誰かが話していて、彼は爪先立ちで私の後ろに回り、軽く私の肩に触れ、そして私が振り向くと、ほほ

40) サルトル、前掲『シチュアション IV』p. 221 ; Sartre, *Situations, IV*, p. 264.

41) メルロ＝ポンティは、モンテーニュの『エッセー』第3巻に、序文として「モンテーニュを読む」を寄稿している。Essais III, Gallimard (folio classique), 1960/65 (pp. 7-23).

42) サルトル、前掲『シチュアション IV』p. 222 ; Sartre, *Situations, IV*, p. 265. アンダーラインは筆者。

えんだ⁴³⁾。

すぐ続いて、

会議は数日間延期された。われわれ、彼と私に、企画を台無しにする委任を受けていた、雄弁すぎるイタリア人と素朴すぎるイギリス人とがしゃべった時に一緒になって腹を立てた時の外は、全面的に意見が合うというわけにはいかなかった。しかし、或る人々はわれわれより年長、他の人々は年少であり、ヨーロッパの四方八方から集まってきた、きわめて多種多様でかくも多くの人々の間にあって、われわれは、自分たちだけにとって価値のある、同じ文化、同じ経験がわれわれを結んでいるのを感じた。われわれはいささかのぎこちなさをおぼえながら、けっして二人だけにはならず、数夜を共に過ごした。それはよいことであった。同席の友人たちが、われわれ自身に対して、われわれの親交を早めに回復させたいという気持ちに対して、守ってくれた。……⁴⁴⁾

両者の性格的な違いと文化的教養の共通性が、巧みにかつユーモラスにも表現された印象的な一節だと思われるがいかがだろうか。もちろん、時代の推移が痛切に感じられる文章でもある。

共通の友人たちにサポートされた、両者の友情の最終的な修復は1961年、メルロ＝ポンティの突然の死の直前に訪れる。

まさに今年（1961年）、三月に、私は彼に再会した。私は高等師範学校で講演を行い、彼がやってきた。このことは私を感動させた。何年も前から、逢いたいと切望し、逢おうと申し出るのはいつでも私の方であった。はじめて彼が向こうからすすんでやってきたのだ。彼が諳んじている諸観念を私が述べるのを聞くためではなく、私を見る〔私に会う〕ためである。終わってから、われわれはイポリットとカンギレムも交えて再会した。私にとって、これはうれしいひとときであった。ところでもっと後になって知ったことだが、彼はわれわれの間に何か居心地の悪さが残っているのを感じたと思った、ということだ。その影さえなかったのだが、間の悪いことに、私は流感にかかっており、すっかり参っていた。別れ際にも、彼は自分の失望を一言も洩らしはしなかったが、それでも私は一瞬、彼が沈み込んでいたという印象をもった。だが私はそれを気にしなかった。

すぐに続いて、

「すっかりもとどおりだ。すべて出直した」と私は心に言った。それから数日たって、私は彼の死を知り、われわれの友情はこの最後の誤解の上に停止することになった。彼が生きていれば、われわれは、私が帰るとすぐに、それを解消させたはずだった。おそらくそうだっただろう。彼が亡き今は、われわれは永遠にお互いにとってわれわれがい

43) 同書, p. 233 ; *Ibid.*, p. 280.

44) 同書, pp. 233–34 ; *Ibid.*, p. 280.

つもそうであった通り、つまり未知のもの同士としてとどまるだろう⁴⁵⁾。

メルロ＝ポンティ側の誤解が解消される直前に、完全な修復を迎える直前で、突然両者の関係に決着がつけられたわけである。相互の対立点よりは、はるかに膨大なその共通性を自覚し・理解したということにおいては⁴⁶⁾、サルトルに限らず、メルロ＝ポンティもまた同様であったろうと思われる。メルロ＝ポンティは哲学的な最終的見解を『眼と精神』⁴⁷⁾や「未来の著書の百五十ページ⁴⁸⁾」に残して旅立った、という形でサルトルは収めている。おそらくそうであろうし、その対立にしろ、共通の基盤に立った対立点・差異とみなすべきであろう。上記の言語学上の差異、ないしは、「直接的」と「間接的」との言語表現上の対立と共存についてもまた然り、というべきであろう。サルトル的区分を詩的な表現の中で一元化するとともに、「経験的」と「創造的」との区別の中で再度編み上げた、と折り合わせてみたが、いかがだろうか⁴⁹⁾。

すでに制限枚数を大きく超過してしまったこの論考もまた、ここで終えるとしよう。

45) 同書, p. 235; *Ibid.*, pp. 281–82.

46) 同書, pp. 234–35; *Ibid.*, pp. 280–82.

47) この著作については、「それを読解することを知ってさえいれば、〔術を心得ていれば〕、すべてを言い尽くしている〔語っている: *qui dit tout*〕」(同書, p. 235; *Ibid.*, p. 282) とまで、サルトルは評している。

48) 遺稿として公刊されることになる『見えるものと見えないもの (*Le visible et l'invisible*)』のことである。

49) この種の収め方には納得されない向きもあるようだが(下記『往復書簡』の訳者も含めて)、われわれとしてはもはや言及しない。その編者エヴァルの受け止め方を紹介して、本稿の脚注を閉じることしよう。「以下の三通の手紙はまず何よりも友情の証言である。二人の人間が、彼らを結びつけるとともに彼らを隔てた情熱を込めて、懸命に筆をとっている。(これは敬意に値することだ。)……それも二つのスタイルによって、知識人のアンガジュマンのありように関する、いまでもアクチュエルな議論を通じて」(『メルロ＝ポンティ・サルトル 往復書簡』みすず書房、2000年, p. 9: *Parcours deux 1951–1961*, Verdier, 2000, pp. 133–34)。